

## 発掘調査の概要

### 甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第161次）

甘樫丘は飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵で、多数の谷が入り込む複雑な地形をしています。『日本書紀』には皇極3年（644）に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘樫丘に営まれていたことが記されています。調査地は丘の東麓から北西に向かって入り込む谷で、約6000㎡の平坦地が広がります。

甘樫丘東麓遺跡では小規模なものも含めて、これまで7回発掘調査をおこなっています。1994年の谷の入口付近での発掘調査では、7世紀中頃の焼土層が確認されました。2005年以降の調査では、谷の中心で7世紀前半に造られたと推定される石垣を長さ34m分確認したほか、掘立柱建物、塀、溝、石敷、石組溝、炉など7世紀から8世紀にかけての遺構を多数検出し、7世紀から大規模な造成をともなう活発な土地利用があったことが判明しています。

今回の調査の目的は、丘陵上部の遺構の有無を確認すること、2008年度の調査で検出した石敷の全容とその背後の斜面の利用状態を明らかにすること、谷の入口部の遺構の様相を明らかにすることの3点です。そのため調査区は斜面、尾根の裾部、谷の入口部の範囲に設定しました。調査は2009年12月から開始し、2010年6月に終了しました。



第161次調査区全景（南東から）

斜面の中腹では、丘陵をめぐるように並ぶ7世紀の柱列を検出しました。裾からの比高は10m、斜面が比較的緩やかになっている部分をさらに平坦にした様子が見えます。柱列は柱穴が3基あり、その間に断続的に掘られた溝と、溝の底からさらに掘削された小穴をとまっています。柱列は塀などの区画施設と考えられ、丘陵上に何らかの施設が存在することを示唆するものです。甘樫丘東麓遺跡は今回までの調査地の谷だけでなく、丘陵の上にも遺構が広がる可能性が高まってきました。

尾根の裾部では7世紀中頃に石敷が造られ、山側に素掘溝を、谷側に石組溝を備え、山側は段状に造成されていました。また、石敷を造る以前にも溝が掘られていたことを確認しています。

谷の入口部では、掘立柱の建物や塀、竪穴建物を検出しました。遺構面がかなり削られ、細かな時期は不明ですが、7世紀以降に4時期程度の変遷があったと考えられます。調査区南端の下層調査では、7世紀前半の谷の造成や、炭・焼土層の広がりが確認されています。

去る3月20日には現地見学会をおこない、1245名の方々にお越しいただきました。甘樫丘東麓遺跡では、谷の平坦地の約3分の2にあたる面積を終え、いよいよ谷の全容の解明へと向かってゆきます。

（都城発掘調査部 番光）



斜面中腹で検出した7世紀の柱列（東から）